

魅力再発見！わが町の伝統文化

侏儒どん

しゅ

じゅ

とんち話の中に人生訓も垣間見える 日当山 侏儒どんの物語

ひなたやま

九州に残る「とんち話」といえば、前回ご紹介した熊本の「彦一さん」や大分の「吉四六さん」が有名ですが、実は鹿児島にも、「日当山侏儒どん」という愛称で親しまれたとんちの名人がいたのをご存知でしょうか。

本名は徳田大兵衛とくだおひょうえといい、江戸初期、薩摩藩・日当山郷の藩の地頭を務めていました。背丈がおよそ90センチと非常に小柄であったことから、小さな人を意味する「侏儒」に由来し、親しみを込めて「侏儒どん」と呼ばれていたそうです。

頭の回転が速く、とんちの利いた会話で周囲を和ませる存在だった侏儒どんは、島津家の殿様からまたいへん可愛がられ、お座敷に招かれたり、共に出かけたりといった数々の逸話が残されています。一方で、薩摩隼人らしい気骨を持ち、殿様の前でも思ったことをはっきり口にすることもたびたびあったようです。それでも本人は滅多に腹を立てることはなく、若い人々にも日頃から「腹を立てるな」と諭し、どんなときもとんちで笑いに変えてしまう、そんな器の大きな人物でした。

霧島山系から南に位置する日当山は、温泉地としても知られています。「侏儒どん」の名を冠した温泉や橋石像が今も残り、地元の人々に親しまれ続けています。



参考文献 「日当山侏儒どん」 伊地知信一郎著 三州談義社出版

とんち話「茶の実」

ある日のこと、城に参上した侏儒どんに、殿様がこう仰せつけました。

「藩内に茶の栽培をすすめようと思っているのだが、日当山もお茶の木が多いようだから、茶の実を集めてくれぬか。」

これには、さすがの侏儒どんも困りました。その時期は茶の実がなる季節ではなく、農家も忙しい時期。たとえ実があったとしても、拾う暇などなかったのです。

これは殿様がいつか侏儒どんをやりこめてやろうと思いい、三日三晩考えたあげくの難問。さすがの侏儒どんも参っただろうと思いい、会心の笑みを浮かべながら命じたのでした。しかし、侏儒どんは涼しい顔で「はい、殿様。さっそく帰りましたら、茶の実を探してお届けいたします」と、ひきうけたのでした。

それから侏儒どんは、日当山で最も年寄りのばあさんを探し出し、このばあさんを連れて鹿児島へ向かいました。城に上がり、殿様の前に出るとならんで頭を下げました。

「恐れながら、殿の仰せのとおり、茶のみを持参いたしました」「うむ、ご苦労であった。して、どこに持参したのじゃ」「ここに控えております」「なにッ、それはばあさんじゃないか」「はい、こちらが日当山でいちばんの茶飲み（茶の実）でございます」

これには殿様も「うむ、茶飲みか」と言っただけ、しげしげとばあさんを眺めて、苦笑するしかありませんでした。

※隼人町役場企画課・商工観光課 一九九六より

一部抜粋・再編集してご紹介

「日当山侏儒どん物語」

